

2023年7月1日 羅須ゼミ

『文学と共同体』——哲学と思想、そして文学とは何か

1. 私と仙台・羅須地人協会

2004年：賢治とモリスの館開館 ～小野寺忠昭さんらと訪問

2005年7月：大内秀明『恐慌論の形成』 ～樋口兼次さん、下山保さんらと訪問

～平山ブログ10/15「恐慌論の形成とコミュニティの形成」に大内先生がコメント。

2006年4月：柄谷行人『世界共和国』 ～樋口兼次さんらと訪問

～平山ブログ8/12「リカードは社会主義と宇野理論」に大内先生がコメント。

～平山ブログ12/19「価値形態論または大内秀明と柄谷行人」に大内先生がコメント。

2007年：(この年からバイクでの作並通いが始まる)

～平山ブログ6/3「脱労働力商品への道とコミュニティビジネス」に大内先生がコメント。

| : (毎年作並に通って研究会と称する酒飲みをする)

2013年：仙台・羅須地人協会発足

2014年：賢治とモリスの館開館10周年 ～社会評論社の松田社長と会う

2014年11月：大内秀明・平山昇『土着社会主義の水脈を求めて』(社会評論社2014.11)

第1部：平山「労農派とその周辺」

第2部：大内「労農派と宇野弘蔵」

2019年5月：『時代へのカウンターと陽気な夢』(SOHOダルマ舎叢書①)

2019年9月：篠原弘典・半田正樹『原発のない女川へ』(同ダルマ舎叢書②)

2020年6月：『西暦二〇三〇年における協同組合』(同ダルマ舎叢書③)

2020年7月：大内秀明『日本におけるコミュニタリアニズムと宇野理論』(同ダルマ舎叢書④)

※『土着社会主義の水脈を求めて』第2部の分割増補版I

2021年9月：羅須ゼミ「オルタナティブな協同組合としてのアソシエーション」

2021年10月：アソシエーションだるま舎立ち上げ

2021年11月：羅須ゼミ「資本主義のオルタナティブは可能か」

2022年1月：羅須ゼミ「福富論文をめぐる考える宇野理論と甦るマルクス」

2022年9月：大内秀明『甦るマルクス』(だるま舎双書①)

※『土着社会主義の水脈を求めて』第2部の分割増補版II

2. 宇野経済学と大内秀明、柄谷行人

2022年1月の羅須ゼミ報告のつづきとして、以下の福留久大さんの文章を切り口に始めます。宇野派の福留久大さんは仙台・羅須地人協会と『日本におけるコミュニタリアニズムと宇野理論』に着目して、社民党系の『進歩と改革』(2021年8月号)に以下のように書いた。

そこでは、恩師・宇野弘蔵に即した『資本論』理解が提示されるだけに留まらず、宇野に欠けた論点を挙げてその補完に努める意志の表明が行われている。…「所有論アプローチ」について、こう述べられている。「自己の私的労働に基づく私的・個人的所有、その否定である社会的労働に基づく私的・ブルジョア的所有、さらにその否定である社会的労働に基づく社会的・公共的所有の『所有法則の転変』を、宇野『原理論』は厳しく批判したのである。こうした批判は、後期マルクスの『資本論』そのものにも向けられ、『科学的社会主義』の基礎づけとなった。宇野理論の真髄は、単なる価値形態や労働力の商品化の強調だけではない。唯物史観のイデオロギーに他ならぬ『所有法則の転変』の全面的否定だった」(153-4頁)。大内には宇野に対する望蜀

の念も残る気配である。「宇野は唯物史観の残滓とも言える『所有法則の転変』を否定し、いわゆる『窮乏化法則』などのドグマを排除したが、モリスなどに積極的に関説しなかったことにもよるだろうが、『共同体』の位置づけなど、コミュニタリアニズムについて積極的に踏み込んではいない。価値形態論を強調し、労働力の商品化の矛盾を資本主義経済の『基本矛盾』として設定したうえで、社会主義の目標についても、宇野は『労働力商品化の止揚』を強調した。しかし、それがコミュニタリアニズムに結びつく点には一切触れることなく、超然と『南無阿弥陀仏』としていたのであり、そうしたイデオロギー的禁欲を続けたままだった」(154-5頁)。このような望蜀の念を越えて、宇野に対する学問的批判の一端も垣間見ることができる。「宇野による『資本論』冒頭の労働価値説批判は、スミスの労働＝『本源的購買貨幣』の批判であり、商品経済的富を『労働生産物』に還元、非労働生産物の労働力だけでなく、土地・自然をも排除されていた。宇野の冒頭商品論は、『労働生産物』ではないが、『資本の生産物』に限定し、一方で価値形態論を重視しながら、スミスや『資本論』とともに、労働力や土地・自然を除外している。そのため『貨幣の資本への転化』『地代論』に難点が生ずるだけでなく、土地・自然に結びつく『共同体』の位置づけ、さらには『人間と自然の物質代謝』との関連も、不明確になっているように思われる」。そう述べた後で、「別稿を準備したい」と明記されたところが注目点である。

大内先生が「別稿を準備したい」とした別稿が分割増補版Ⅱの『甦るマルクス』になるわけで、私は福留先生の『進歩と改革』連載に、『甦るマルクス』評を加えて本にしたいと考えたわけだが、残念ながらその前に福留先生は亡くなられてしまった。そして私には『土着社会主義の水脈を求めて』第1部の分割増補版を出さねばという課題があり、私はそのそのテーマを「文学と共同体」としたわけだが、共同体論については『世界共和国』以降の柄谷行人を読みつづけていて、2021年11月の羅須ゼミ「資本主義のオルタナティブは可能か」のレジメ「柄谷行人氏のアソシエーション、高邁な思想とささやかな実践」に以下を書いた。

佐藤優氏の非営利で相互扶助の「小さな中間団体」は、柄谷行人氏的には「アソシエーション」でしょうか。柄谷行人氏は、当初は文芸評論家として知られましたが、1974年に書いた『マルクスその可能性の中心』を読めば、青木孝平氏や佐藤優氏と同様に宇野弘蔵の影響を受けていることが解り、本人も認めています。2001年に出した『トランスクリティーク』の結論は「協同組合」と「とくじ引き」であり、同年にNAMの運動を立ち上げ、2005年に『近代文学の終わり』(インスクリプト2005)を書いて文学を見切り、NAMの運動は2年で失敗したものの、その後は『世界共和国』、『世界史の構造』に、社会的構成体を交換様式から、A贈与の互酬、B支配と保護、C商品交換、DとしてBやCによって抑圧されていたAへの回帰を提起し、『哲学の起源』においては、従来民主主義のルーツとされてきたアテネの直接民主主義と「ヘーゲルの弁証法の原型」となったプラトンの「他者との対話ではない理(ロゴス)の自己対話というかたちで語られる学説」を批判し、「出来事を事後的あるいは目的論的に見る観点」を否定して、「イソノミア＝無支配」を論じてたパルメニデスらイオニアの哲学者たち「模範的預言者」を見直すなど、肩書的にも哲学者となりました。

柄谷行人氏は、「DはAの高次元での回復ですが、Aと同様に、意志的に作るものではない。いわば神の意志として生じる」とし、これは青木孝平氏の「資本主義の全体性そのものを克服するのは、他者の他力」や佐藤優氏の「急ぎつつ待ち望む」とも通底するわけですが、青木孝平氏と佐藤優氏が社会運動には関らないのに対して、「交換様式という見方が大事なのは・・・それらを揚棄する道を、たんなる〈理念〉としてではなく、示しうるということです」(『ニュー・アソシエーションIST宣言』(p39)として、再度のNAM運動を提起し、アソシエーションの形成＝互酬

型交換様式の実践を呼びかけ、身近で塾をし、日常的に生活クラブ生協のデポーを利用とか、ささやかな実践をしています。

3. 柄谷行人の「実験の文学批評」

柄谷行人は2022年末に、哲学のノーベル賞といわれる「バーグルエン哲学・文化賞」の授賞し、年明けには朝日賞を受賞して、元旦の朝日新聞に『力と交換様式』は文芸批評。古今東西、いろんなものを読んで考えた。全ては文学といえば文学ですから」と語っており、4月12日の朝日新聞では、「江藤淳の『成熟と喪失』だと、成熟には喪失を伴うという感じですが、僕は全然成熟していない。喪失もしてないですよ。だから、いまだに同じことをやっているようなもの。自分にとっての謎を考え続けてきた。「どうしてこういう人間なんだろう、と思いますね。いま取り組んでいる問題もさかのぼっていったら、そういう実存的なことに行き着くのかも知れない。別にそんなもので思想家は成立しませんよ。だけど一方では、どうも哲学とか何とか言っても、結局、自分の問題をやっているんだよな、という感じはある」と語っている。

5月3日に柄谷行人の「バーグルエン哲学・文化賞」の授賞式があり、授賞の対象になったのは、『探求』I,IIから『トランスクリティーク』にいたる営為であったようだが、柄谷行人氏は、それらについては2022年に『力と交換様式』にまとめて、2019年には『世界史の実験』を出して、そこですでにポスト『世界史の構造』を構想し出しており、柳田国男が追い求めた人々の協同性の原点である「山人」について、そこに「山人的なものは、もっぱら文学・文学評論において追及されてきた。それは山人の原遊動性が、経験的な探求を許さないものだからである。しかし、私自身は、抽象力（思考実験）によって、この問題に接近できるのではないか、と考えている」（p182）と書いた。私はこの部分を『西暦二〇三〇年における協同組合』で引用して、その後アソシエーション研究会を企図したわけだが、要は、新しい協同組合＝アソシエーションによる「新しい共同体」を構想するには、「抽象力（思考実験）」が要諦であると思ったところです。

そしてこの5月に柄谷行人『柄谷行人「力と交換様式」を読む』（文春新書）が出版されて、中身の大半はすでに「文学界」や「文芸春秋」などに掲載されたものなのだが、初読みの「文学という妖怪」という20頁ほどの短い文学論があって、これは柄谷行人が文芸批評家から哲学者に転じた頃の二著、『日本近代文学の起源』と『近代文学の終わり』について、かつて私はこれを読んで「私はせっかく協同組合を辞めて文学をやろうと思ったのに、柄谷行人は『トランスクリティーク』を書いて協同組合を提起して近代文学の終焉を上げるとは」と嘆いたものであったわけだが、その真意の解説、いわばその種明かしとして以下のように書いている。

「『近代文学の終わり』という言葉は、『日本近代文学の起源』という言葉に対応するもでは、それは何を意味するのか。実際のところ、近代文学は終わっているところではない。その逆です。それが隅々まで浸透した状態になったのです。「現在、私は“近代と前近代”というような観点をとりません。それを「交換様式」の観点から見えています。そうすると、写実主義、自然主義、ロマン主義と呼ばれるような「近代文学」とは、交換様式Cの優位によって成立した世界である、ということができる。それに対して、「ルネサンス的文学」はCの優位の下で成立すると同時に、抑圧されたAを回復することによってそれに対抗するものだ、ということができるのです。明治文学でいえば、二葉亭四迷や夏目漱石がそうです。二葉亭四迷はロシアの小説（ゴーゴリとドストエフスキー）、漱石はイギリスの小説（スウィフトとスターン）を受け継いだ。つまり、彼らはいわばルネサンス的文学に共感したのです。そして、同じようなことを日本の文脈でやろうとした。「今世紀に人って、韓国社会は全面的に資本主義経済に浸透されたように見えます。しかし、それと同時に、全面的に文官支配の社会になったように見えるのです。いわば誰もが科

挙を目指すような社会に。つまり、交換様式でいえば、CとBの下で、Aが逼塞してしまったように見えます。その意味で、文学が終わった、という感じがする。もちろん、程度の差はあっても、日本においても基本的に同じです。たぶん、世界的にどこでも同じ状態になりつつある。しかし、それによって文学は消滅する、と私は思いません。Aは別の形で強迫的に回帰してくる、すなわち、Dとして。昨日の「近代文学の終り」をめぐる会議で、イギリスの批評家、アンドリュウ・ギブソン教授はこういいました。文学は死んでも、終わらない、それは妖怪のように付きまとう (haunt)、と。私も、文学は必ず何らかのかたちで回帰してくる、と思います。「全世界に妖怪が徘徊している、文学という妖怪が」というべき事態が来る、と」。

そしてこれを読んだ私は、『土着社会主義の水脈を求めて』第1部の分割増補版の表題を『文学と共同体』としたことに確信をもったわけだが、確信をもったから前記した「抽象力(思考実験)」が出来るわけではない。ではどうすればいいのかと『世界史の実験』を読み直すと、そこには「歴史の自然実験とは、多くの面で類似しているが、その一部が顕著に異なるような複数のシステムを比較することによって、その違いが及ぼした影響を分析するものです。実は、柳田の仕事を見ると、この考えは役立ちます。その場合、私は、島崎藤村と比較するのがよいと思うのです。言うなれば、これは「実験の文学批評」です」と書かれている。そこで私は年初から柳田国男と島崎藤村を読み出し、さらにこの二人のほかに、木下尚江と宮澤賢治を旧版に書き加えて、来春の出版をめざして『文学と共同体』をまとめようと、悪戦苦闘中。

4. 哲学と思想、そして文学とは何か

いま私は柳田国男と島崎藤村の類似と差異を考えるわけだが、類似には「父親が平田国学の神官」「幼くして故郷を離れて兄と上京」「『文学界』と抒情詩」「詩の別れ」「代表作を自費出版する」「2,3年の在欧体験」などがあり、差異には「東京帝大と明治学院」「官僚と田舎教師」「後狩詞記』『遠野物語』と『破戒』『春』」「民俗学と自然主義文学」「脱近代主義と近代の超克」「国際連盟と国際ペンクラブ大会」「『先祖の話』『海上の道』と『夜明け前』『東方の門』」といったことがあるか。しかしこれも差異が分かれば「実験の文学批評」や「抽象力による思考実験」が可能かと言えば、柄谷行人ならいざ知らず、「実験」の方法や「抽象力」の無い凡夫の私には不可能であろうし、柄谷行人によるポスト交換様式論として「思考実験」が出版されるなら、それを読んでエピゴーネンするところだが、雑誌連載は始まるだろうけど来春前には出ないだろうから、私は私なりの「凡庸な文学批評」を書くしかない。唯一の手がかりは、前記した朝日新聞での発言「僕は全然成熟していない。喪失もしてないですよ」と「いま取り組んでいる問題もさかのぼっていったら、そういう実存的なことに行き着くのかもしれない。…どうも哲学とか何とか言っても、結局、自分の問題をやっているんだよな、という感じはある」であろうか。柄谷行人は、大学で宇野経済学を学んだ後に文藝評論家になり、近代文学の終焉を告げた後には哲学者とか思想家になり、今では「全ては文学といえば文学ですから」と語っているから、次は文学者になるのであろうが、柄谷行人は『近代文学の終り』にこう書いている。「私は話を一人の小説家のことから始めたいと思います。それはサルトルです。…サルトルは哲学者であり…私の考えでは、彼は根本的に小説家なのです」。「彼は小説だけでなくあらゆることをやった。だが、それを可能にしたのは、小説あるいは小説家の視点です」と。柳田国男と島崎藤村の対比で言えば、若き日に『文学界』を共有した二人が、晩年というか戦争の最中に書き出したものは、藤村は『東方の門』であり、柳田国男は『先祖の話』であった。そして柄谷行人は、「実験の文学批評」で柳田国男の肩をもつのであろうが、高校2年の春に島崎藤村『春』とサルトル『嘔吐』を読んだ私は、「凡庸な文学批評」を書いて藤村の肩をもとうと思うわけである。